

Save The Tropical Forests



森の通信

2012.10.16



▲アマゾンの大きな木と先住民の少年(右は石崎)

CONTENTS

- people(26) 地球サミット「リオ+20」で出会った人々……3P
- 「リオ+20」へ参加して 石崎雄一郎……4P
- 「リオ+20」後の展望～脱原発アベールとアマゾン森林保護活動、浅田聡……10P
- 崩れていくアマゾン 西岡良夫……12P
- 2012・第一回ホルネオ・エコツアー 浅田聡……13P
- 押し寄せるプランテーション開発 浅田聡……17P
- タンジュン・アティン公園 開発計画!!……18P • 世界の森林ニュース……19P



ウータンの新たな活動の1つになったのは、【ラミンなど違法材停止キャンペーン】だ。来日の Telapak と違法輸入ラミンを大阪・岸和田港で発見が発端。2003年、違法伐採で250名死傷の事件が契機で、ラミン材や他の違法材停止に向けて行動を始めた。その後、Telapak 等と連携して、密輸ラミン材は2008年から国際貿易から姿を消し、ほぼ貿易できない状態となる。インドネシアで違法伐採の摘発が相次ぎ、「ボルネオ島での密輸材取引」は最盛期2002年から約8割減った。

私たちは今後の大きな柱である「ボルネオ島森林保全」に取り組み、この2-3年間でインドネシアの原生種植林の支援や、CO2が大発生の泥炭湿地の破壊を防ぐための協力へと動きだした。大半の国立公園は違法伐採停止となり、原生種植林と「村おこし」が進みだしたと思った。油断があった!

だが違法伐採は地方NGOの活動が薄れ、最近報道もなく、秘かに動き出したらしい。また植林支援とエコツアーの1つの場所であるタンジュン・プティン国立公園のハラバン村では、以前アブラヤシ開発に抗議していた村人がアブラヤシ企業の側に雪崩れだしていた。姑息にも企業と地方政府が今年の5月以前からアブラヤシ開発を公園内外に計画していたのが、8月に判明した。

現地 Friends of National Parks Fond (FNPF) カリマンタンは、この間議論し、土地測量を始めている。FNPF バリ本部からこの問題にどう対処するかの記事がまだなく、当会は Telapak、FNPF カリマンタン、Wetlands インター等と連携を取り、日本からできる方法を検討している。現地からの詳細な情報交換と調査・分析が絶対必要だ。

今後、村とどう関わるか、仲間を信頼しあえる関係を如何に持てるかという方向と、モラトリアムの間で如何にアブラヤシ開発を防ぐか、泥炭湿地保全をどうするか方針の1つにもなる。

活動は成果だけでない。失敗もある。お互いにどのように連携し、信頼を深められるかだ。問題を点検でき合えるメンバーが必要だ。その意味で、新しい若い仲間も参加してくれてありがたい。国際活動等はまず詳しい調査と連携が必要であり、それから行動を広げられる。参加する中で古いメンバーの経験等を学んでほしい。私ら、古いメンバーも新たな活力、感覚が必要だ。(N)

\*\*\*\*\* ウータン活動報告 \*\*\*\*\*

- 2012・4月中頃—Rio+20会議へデータ収集\*西岡、石崎
- 5・18 リオ+20会議へ提案文検討\*春日、西岡、石崎
- 6・8 リオ+20会議へ当会、FoEJapan, JATAN, A SEED Japan で提案文作成
- 6・9 エコツアー参加説明会・学生向き報告等\*石崎、浅田、西岡
- 6・12 リオ+20会議へ森林保全提案(当会、FoEJapan, JATAN, ASEEDJapan, FNPF)送付
- 6・15-6・26 リオ+20会議に参加、アマゾン訪問\*石崎
- 7・3 【通信ウータン106号】発行
- 7・21 『リオ+20会議報告会』\*ウータン、地球村の共催\*報告/石崎、西岡、瀧、高崎
- 8・3、8・10 インドネシア・タンジュン・プティン国立公園等のエコツアー説明会
- 8・17 『地球サミット20周年記念リオ+20報告会』環境NGOリーダー語る\*秋本、西岡、石崎  
\*共催・ウータン、環境市民、京のアジェンダ21
- 8・25-9・1 ウータン、エコツアー\*タンジュン・プティン、Wetlands 植林地\*視察、石崎、浅田等
- 9・11、9・16 緊急会議\*8/26以降タンジュン・プティン公園のアブラヤシ開発問題で現地と連絡

# People 26 Save the World's Forests!

地球サミット『リオ+20』で出会った人々

世界中から実に4万人以上もの人が参加した地球サミット『リオ+20』には先住民も多く参加していました。彼らは、はるか遠い道りをやってきて先祖代々住み続けた神聖な森や川や海が、グローバルな資本主義経済によって奪いとられないように訴えていました。大地、生きもの、食、人権、子どもたちの未来がそこにはありました。(石崎)



会場でもひととき目立っていた  
インドの哲学者/環境活動家  
ヴァンダナ・シヴァさん



もしや南研子さんの本にたびたび出てくる  
カヤボ族のラオーニさんでは・・・!?



インドネシアの先住民バタク族  
アブドン・ナババンさん  
\*毎日新聞のインタビューより



チリの先住民マイマラ族リーダー  
リオサミット用の先住民村にて



20年前の地球サミットで伝説の  
スピーチをしたセヴァンスズキさん  
は二児の母として帰ってきた

## 地球サミット・リオ+20へ参加して



石崎 雄一郎

### 地球サミット『リオ+20』の経緯

2012年6月に地球サミット『リオ+20』がブラジルのリオデジャネイロで開催され、ウータンからは石崎が参加しました。東西冷戦が終わり、地球規模での環境問題と貧困問題が大きく取り上げられた1992年の『地球サミット』では、各国が持続可能な社会を目指していくことを宣言した『リオ宣言』とそのための行動計画『アジェンダ21』が採択されました。そこでは『気候変動枠組み条約』や『生物多様性条約』といった多くの重要なことが決まりましたが、森林問題に関しては、木材が主要な経済資源であるマレーシアをはじめ当時の開発途上国からの反対もあり『森林原則声明』にとどまりました。そこから20年たって、改めていま世界がどうなっているのか、私たちが今後の未来に向けて何を望むのかを考え話し合った国連会議がリオ+20なのです。主要なテーマとして、環境保全と経済成長の調和を目指す『グリーン経済』、持続可能な世界を作るために国家間のより大きな枠組みをつくろうという『SDGs (sustainable development goals)』などが話し合われました。

### 『リオ+20』の意義

この20年で、NGOの数は増え、それに伴い様々な環境活動や貧困対策案などが生まれていますが、現実の地球が抱える問題はますます悪化しており、最悪の方向へ向かっています。人口は2050年に90億人に到達するとみられ、より深刻化する食料問題と貧困問題、それに伴う食料のための農地拡大がもたらす大規模開発による環境破壊はますます深刻になるでしょう。温室効果ガス排出量は増え続けており、気候変動に歯止めがかからなければ、これまで確認されている生物種全体のうち3分の1以上が絶滅する恐れがあると言われています。森林に関しては、この10年間で日本国土の約3.8倍の熱帯林が失われました。今後もボルネオでのパーム油やアマゾンでの牛肉・大豆など、プランテーションへの農地転換として森林が切り開かれる可能性が世界中にあります。同時に、人権・ジェンダー・福祉なども持続可能な社会を作っていくために欠かせないテーマです。これら幅広いテーマは地球規模に渡り、世界の国々が力を合わせなければ解決できない問題ですので、世界中から首脳・閣僚が集まり、また市民・地方自治体・産業界・学者・先住民・農民など幅広い参加を交えて行われる国連の地球サミットは極めて重要な会議と言えます。

## ウータンとしての活動 ①政策提言

リオ+20の直前に、リオ+20に参加するNGOのネットワークとして作られた『NGO連絡会』の主催で行われた『NGO/政府の意見交換会』へ出席し、ウータンからは「大規模開発による熱帯林破壊をやめ、先住民の暮らしに学ぼう！SAVEアマゾン！SAVEボルネオ！」と題して、次の3つの意見を提言しました。

### 1. 森林、生物多様性、大規模プランテーション開発について：

ボルネオでは、アブラヤシプランテーションやダム開発によって、熱帯林が減少し、オランウータンなどが絶滅の危機にあります。アマゾンでも、牛肉のための牧場転換、ダム開発、大豆プランテーション開発などで熱帯林が減少しています。これらは、生物多様性と気候変動にも重大な影響を及ぼします。COP10で名古屋議定書が発行され、日本は生物多様性のリーダー的役割を担い、未来へ向けて生物多様性を維持し、人類が幸せに暮らせる道を探ることが必要です。

### 2. 開発と先住民の権利について：

開発により、生きる場所を奪われてきた先住民がいます。彼らは昔から、森と共に自給自足の平和で持続可能な生活をしてきました。私たちは、彼らに学び、大規模開発・大量生産・大量エネルギー消費の道を改める必要があります。

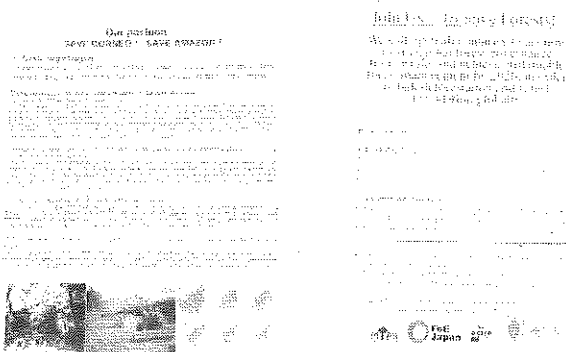
### 3. 原発問題について：

福島第一原発事故は続いており、政府の十分な謝罪と対応もなされていません。大量の放射性物質が大気中、海に放出され、被害は拡大しています。ウータンとしても生物多様性の観点や資源発掘が先住民に与える影響などから、見過ごすことはできない問題です。現在54基の原子炉は動いておらず、私たちは原発が不要と考えています。稼動していた原子炉はすべて廃炉にする、原発を輸出しない、再生可能エネルギーにシフトしていくことが責任の取り方だ、とアピールしたいと思います。

これらのNGOからのメッセージは要約集としてまとめられ、日本政府へ提出されました。また、この時出席していた新聞記者とリオの現地で再会し、先住民ブースを案内したところ、後にインタビュー記事として取り上げられることになりました。

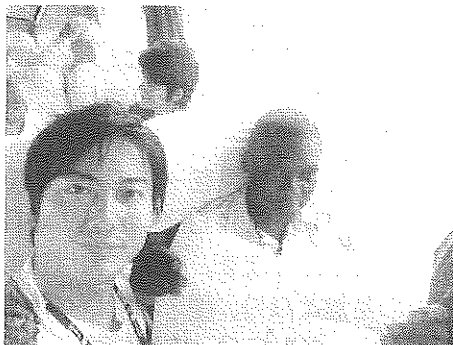
地球サミット『リオ+20』の大きな目的の一つは、各国の意見を一つにまとめて持続可能な世界を作るための指針となる『成果文書』（「THE FUTURE WE WANT -私たちの望む未来-」と名付けられました）を作ることにあります。成果文書は法的拘束力はありませんが、今後の国際的な枠組み作りの基盤となり、国・地域レベルの政策にも大きな影響を与える重要なものです。ですから、各NGO・市民団体もこの成果文書に対して自分たちの意見を入れ込むために様々な政策提言活動を行います。ウータンは『森林』の項目に対して政策提言を行いました。森林は、1992年の地球サミットでは、『森林原則声明』にとどまってしまいましたが、今回のリオ+20の成果文書素案（ゼロドラフト）では128あるパラグラフのうちたった1つでしか触れられておらず、具体的な目標のない内容として乏しいものでした。

ウータンでは、はじめに呼びかけてくれた国際青年NGO『A SEED JAPAN』とともに、成果文書に対して『プロポーザルペーパー』を作り、より具体的で強い表現を盛り込むようにアピールすることにしました。その際に、自分たちの立場と考えを表明するための『ポジションペーパー』も同時に作成しました。初めはなかなかいい文章が作れませんでした。作成段階で同じく熱帯林問題に取り組んでいるNGO『FoE Japan』や『JATAN』にも協力を呼びかけ修正を重ねました。最後に『FoE Japan』の理事長ランダル・ヘルテンさんによるネイティブチェックも入れてもらい、いい文章を完成することができました。また、ウータンからの呼びかけによりインドネシアのNGO『Friends of the National Parks Foundation (FNPF)』にも共同声明に参加してもらいました。国際連携での呼びかけはより効果が高いので、もっと早くインドネシアの他のNGOにも声をかけておけばよかったと思います。



プロポーザルペーパーには「2020年までに持続可能な森林管理の枠組みを強めるためすべての国に今すぐ行動を求めろ！」と題し、そのために「1. 違法伐採の停止 2. 大規模プランテーション開発等破壊的な森林の使用禁止」を提案しました。

実際のリオ+20の現場では、国を代表して参加している政府交渉官へ手渡しでアピールするいわゆる『ロビー活動』を行いました。ホテルから会議場へ向かうバスの中や会議場で会議前の時間を使ってアピールを行いました。世界で二番目の広さの熱帯林を持つアフリカの交渉官等もパームオイルの問題などに興味を持ってくれ、セネガルの女性交渉官は「できれば会議でアピールをしてあげる」と言ってくれました。



さて、実際の成果文書の最終案では、森林には「283 のパラグラフのうち4つ」が割り当てられました。当初より数は増えたものの、具体的な数値目標は盛り込まれませんでした。今後の国際会議などで成果文書に対してアプローチしていくためには、ゼロドラフトの以前、準備会合の早い段階から始めることが必要となるでしょう。

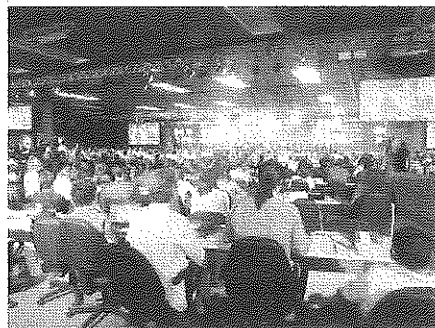
## ウータンとしての活動 ②情報収集

リオ+20の期間中は、首脳級が集まる『本会合』だけでなく、500を超える『サイドイベント』、ブラジル政府主催の市民対話『ダイアログ』、市民による市民のためのサミット『ピープルズサミット』など公式・非公式を合わせて実にたくさんのイベントが開催されました。

たとえば、「森林の減少・劣化を防止することでの温室効果ガスの排出削減」と「植林事業や森林保全による炭素ストックの積極的な増加」を図る『REDD+』はリオ+20でもたくさんのイベントが開かれました。インドネシアはユドヨノ大統領も出席した『REDD+ taskforce』というサイドイベントを大々的に開き、ガイアナの大統領とノルウェーの環境大臣もREDD+による協力を大きくアピールしていました。国家レベルでのREDD+推進が図られる一方で、会場では先住民グループやローカルNGOを中心に数多くの『REDD+反対運動』が行われました。その大きな理由として「政府が森林を一元管理することにより、長い間森で生活してきた先住民等が森林の資源にアクセスできなくなったり、原生林が切り開かれプランテーションの植林が加速したりするリスクがあること」などがあげられます。

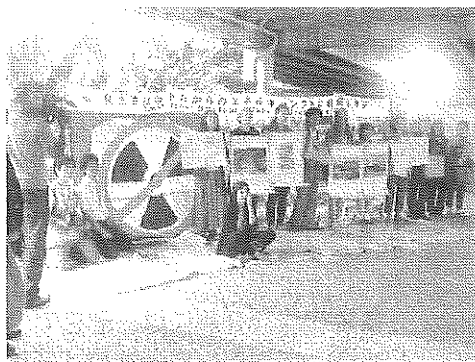
現に各国『パビリオン』でのマレーシアのブースでは「アブラヤシプランテーションは熱帯林と合わせて70%以上あり、CO2を吸収し地球環境に貢献している」という典型的な『グリーンウォッシュ』（実はそうではないのに環境に良いと見せかけた宣伝文句）がなされており、注意深く様々な意見を調べる必要があります。

話を聴くだけではない市民参加型の『ダイアログ』というブラジル政府主催イベントもありました。これは、市民参加を具体的な目に見える形でおこなう試みとして、事前にインターネットで意見が募ったり、当日は自分の賛同する提案にスイッチで投票したりと実にユニークなものでした。さすが国際会議に積極的に参加している人々ならではの白熱した場となりました。



## ウータンとしての活動 ③脱原発アピール

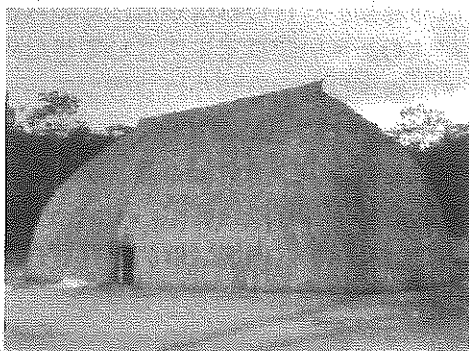
今回のリオ+20では、日本政府を代表して玄葉外務大臣が「東日本大震災を経験した日本として災害に強い環境未来都市を作る」と宣言した一方で、福島原発事故については全く触れませんでした。事故から一年あまりで収束もしていない状況ですので全く理解しがたいことです。ウータンでは、ネットワーク『地球村』の呼びかけに賛同し、本会合の最終日に他のNGO等と共に本会議場のど真ん中で脱原発のアピールを行いました。このアピールでは、日本の脱原発賛同団体の写真を載せた大きな横断幕をバックに、『ピープルズサミット』で集めたたくさんのブラジル市民の声や、ネットで呼びかけた日本の各団体の声をいただき、「For our children, Nuclear free!」の掛け声で一時間あまりのアピールを行いました。





## これからの未来へ向けて ①先住民に習う真のグリーン経済

リオ+20で話し合われた大きなテーマの一つが『グリーン経済』です。世界人口が増え続ける中、従来の先進国のような発展モデルを全ての国が目指せば、資源枯渇・食料不足・環境破壊・健康被害など様々な問題を引き起こすでしょう。そのため環境保全と経済成長の調和を目指すグリーン経済こそが、今後の持続可能な発展を考える鍵となると言われました。しかし、このグリーン経済は リオ+20が始まる前からたくさんの批判にさらされ、本会合でも具体的な数値目標を立てられないまま終わってしまいました。グリーン経済の名のもとに自然が商品化されたり、投機の対象になることで却って環境破壊が進んだり、コミュニティが破壊されることが懸念されたのです。『真のグリーン経済』とは何か、僕がリオ+20で見聞きした先住民グループの話しの中にそのヒントがあったような気がします。



### i. 持続可能な開発の最も基本的な次元としての文化の尊重

現代の発展モデルは、最も重要な価値である『自然の多様性』とそれに根付いた『文化の多様性』を破壊する危機をはらんでいます。インドネシアの先住民バタク族のアブドン・ナババンさんは、毎日新聞の取材に対し「伝統的な農業・漁業など持続可能な開発を、私たちは何百年も前から実践してきた。低炭素社会、有機農業、グリーン経済もだ。持続可能な開発に文化の尊重は不可欠だ。それを欠いた開発は植民地主義だ。日本企業も国内では日本の文化を尊重するのに、海外で開発事業を行う時はそこに根付く土着の文化を尊重していないのではないか。この点で成果文書は文化の尊重をもっと強調してほしい。」と述べています。リオ+20では『環境・経済・社会』の3本柱に言語、生活様式、社会的価値観などの『文化』をプラスすべきだという意見も聞かれました。

### ii. 人権と集団的権利の完全な行使

持続可能な発展には、そこで生活する人の政策決定・立案・プロジェクトへの参加と決定の権利が必要となり、それらは『基本的な人権』を満たしてこそ達成されるものです。僕が先住民村を訪れてお会いしたチリの先住民マイマラ族リーダーの方は、インタビューにこのように答えてくれました。「南米部族が集まり、人権とテリトリーを主張するためにサミットに来た。リオ+20の成果文書に盛り込むために会合参



加を求めたが受け入れられなかった。リオ+20の結果は資本主義で終わってしまい残念だ。チリの我々の住む土地では違法な鉱山開発が行われ、開発により出た有害物質が川に流れ、病気になったりしている。ピオネルシムケンタという会社が農薬のテストをインディオの女性に対して行い、奇形児が生まれている。これからも先住民の人権のために働きかける。」

### iii. 土地の権利と地域に根付いた経済の活性化

世界を席卷する『グローバル市場経済』は、様々な製品やサービスが世界に行きわたり享受できるといった反面、貧富の格差や持続不可能な大規模開発による自然や生物多様性の破壊、多様な文化の画一化などの問題が指摘されます。それに対し、地域に根付いた経済こそが、『地域コミュニティ』を支え、弾力性のある生態系を支えると先住民グループは主張します。その土地でたくさんの種類の伝統的にある作物を作っているうちは、自給自足のスタイルが続けられ、安定が保たれます。一方、外部から入った単一の換金作物に収入を頼るようになれば、その作物が売れなくなれば借金が残り、食べるものも自給できなくなってしまいます。

### これからの未来へ向けて ②「地域」から世界を変える

リオ+20で、グリーン経済とともに大きなテーマとして話し合われたことのひとつが、持続可能な開発のための制度的枠組み『SDGs (sustainable development goals)』です。持続可能な世界を実現するためには、貧困削減・教育・保険医療・環境などのそれぞれのテーマをより包括的に話し合う場が必要であり、そのためには例えば『UNEPの役割を強化する』ことや、『持続可能な開発のための国連理事会』のようなより大きな枠組みを作ることなどが考えられます。このSDGsですが、グリーン経済と同様に交渉は難航しました。枠組みを作る目標を策定することについては合意されたものの、今後どのように進んでいくかは未知数です。このように国家間の交渉は、それぞれの国の思惑もありなかなか進みません。それならば国家の枠を越えた『都市間の連携』や『地域ごとの連携』、また『市民・NGO同士の連携』等がより重要になってくるでしょう。

### これからの未来へ向けて ③立場を超えたネットワーク作り

今回『NGO連絡会』を通して『政府とNGOの意見交換会』等が行われましたが、NGOや市民のような小さな声を伝えていくには、今後もより大きなネットワーク作りが必要となります。また、俗に言う『開発系NGO』と『環境系NGO』の間には隔たりが少なくないようですが、環境問題と貧困問題には密接な関係性があり、解決しなければいけない部分は重なっているはずで、またリオ+20では、『ユースグループ』や『女性グループ』が目立った活躍をしていましたが、脱原発デモの時に欧米の女性グループが急遽参加してくれたように「行動」や「それぞれの想い」は共有できます。今後は一つしかない地球の未来のためにお互いの知識や意見を交換しあい、それぞれの持ち味を生かして、より良い協力をしていくことが必要でしょう。

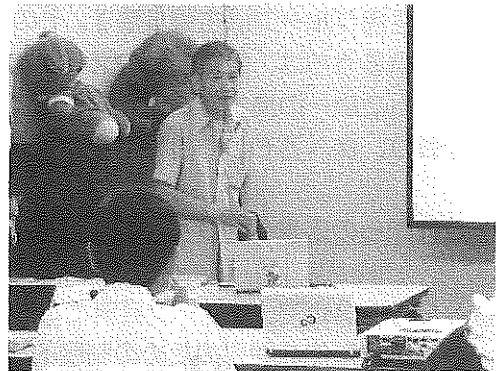
## 「リオ+20報告とその後の展望～脱原発アピールとアマゾン・森林保護活動」

浅田 聡

去る6月13日から6月22日までの間、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロで、1992年6月5日から開催されたリオ・サミット（地球サミット）について、今後の地球を考えるための「リオ+20会議（国連持続可能な開発会議）」が開催されました。そこで今回は、この会議に参加したウータン及びネットワーク「地球村」で行った報告会（7/21開催）の概要をご紹介します。

### 1 「20年前のアマゾン・ブラジルの森林破壊問題」（ウータン・西岡）

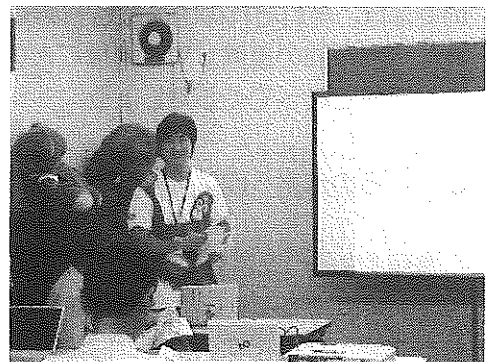
1970年、ブラジル・アマソンの熱帯雨林は4,100,000k m<sup>2</sup>であったが、2005年には3,403,000k m<sup>2</sup>にまで減少し、17.1%の熱帯雨林が失われた。アマソンの森林減少の原因は、①牧場開発、②違法伐採、③ダム・鉱山開発、④セラードの大豆開発、⑤小規模な移民の焼畑であるが、牧場開発が最も大きな原因となっているため、この開発を止めることが大変重要である。また、



ブラジルでは、1965年に作られた「森林法」により、国内の森林所有者の開発行為が制限されたため、2010年に違法伐採が大幅に減少し、森林劣化も減少したが、この森林法の規制を緩和させる措置を盛り込んだ修正案が、現在ブラジルで検討されており、今後、修正案が成立すればアマソンの森林への悪影響が懸念される。

### 2 「リオ+20会議の森林問題アピールとアマゾンで見てきたこと」（ウータン・石崎）

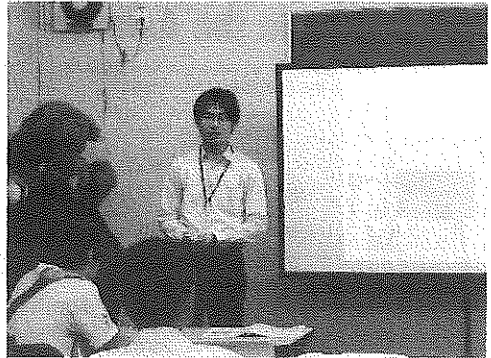
6月に行われたリオ+20は、1992年に開催されたリオ・サミットから20年が経った現在において、これまでの20年を振り返るとともに、これからの課題を話し合うことを目的として、グリーン経済及び持続可能な開発のための制度的枠組みを主要なテーマとしてブラジルのリオデジャネイロで開催された。ウータンとしては、大規模開発による熱帯林の減少と先住民の権利、及び原発問題の3つのテーマについて、他のNGOと共同で政策提言を行ったが、本会議で最終的に採択された成果文書「The Future We Want」は、具体的な数値目標やロードマップのない実効性に欠けるものに終わってしまった。未来に向けてこれから私たちがすべきことは、真のグリーン経済の実現のために、地域の資源を使った伝統的なやり方で発展をしていくことが必要であり、様々なネットワークを作って、より強力な提



言を行っていくことが重要である。

### 3 「ピープルズサミットと本会議場での脱原発アピール」(地球村・高崎氏)

脱原発について、日本国内で賛同していた  
40団体の顔署名入り横断幕で地球サ  
ミットの本会議場(リオ・セントロ)と、NG  
Oの集まるピープルズサミット(リオ・フラ  
メンゴ広場)でデモを行った。デモ時に受け  
た各国の取材の多さから、世界が日本の原発  
の動向について注目していることがうかがえ、  
日本は今後も原発の問題について真剣に向き  
合わなくてはならないと感じた。また「地球

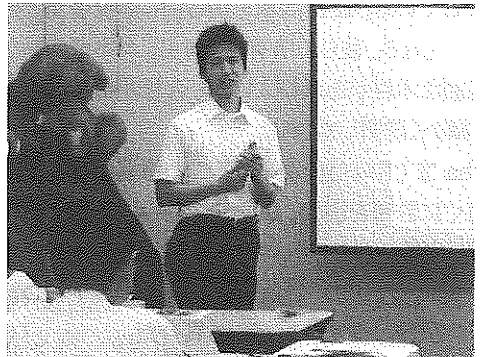


村」は、10年前にヨハネスブルクで開催された地球サミットで「地球市民国連」構想  
を提唱し、今回のリオ+20でも主に会議に参加した NGO に対して、地球市民国連の  
趣旨を説明し、多くの賛意を得た。今後、リオ+20で得た繋がりをもとに、国内外  
の NGO とネットワークを構築し、市民を束ねる NGO 間の連携を強化していきたい。

### 4 「宮脇方式でのアマゾン植林活動」

#### 「リオから作る地球市民ネットワーク」(地球村・瀧氏)

「地球村」とアマゾンで植林活動にあたって  
いる NGO 「Asflora (アスフローラ)」(ア  
マゾン森林友の協会)が協働で進めている「地  
球村の森」の活動として、去る6月25日にブラ  
ジルのベネビーデス市 Aimex 種苗センターにて、  
『地球村の森2012』植樹祭を行った。当日は  
現地小学生など、計109名の人々が集まり、  
1300本の苗木を植え付けることができた。ま  
た、リオ+20への参加によって、国際会議(地  
球サミット)の問題点として「世界共通のルールを作ることの限界」と「地球サミッ  
トそのものの意義の低下」が明らかとなった。今後、プロジェクト単位で NGO 間の  
結束を行い、政府と NGO 間の連携を取るとともに、垣根を越えた多分野の連携を行  
っていく必要がある。



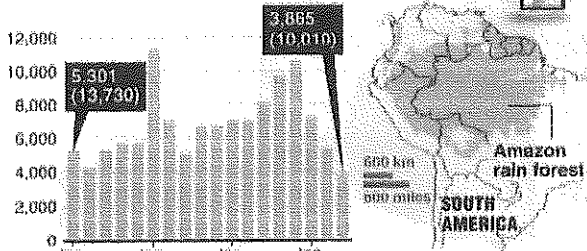
# 崩れていくアマゾン—Rio+20 会議は

開発容認への会議へ！

西岡良夫

## Deforestation in the Amazon

Estimated forest losses annually, in square miles (square kilometers), according to the Brazilian government:



Source: National Institute of Space Research (Brazil), [satellite.mongabay.com](http://satellite.mongabay.com)  
Graphic: Angela Smith

© 2007 FACT

### 森林破壊の主要原因—7割が牧場開発(ブラジル森林破壊)

#### 【無差別伐採は続く？Rio+20 で開発停止の案無し】

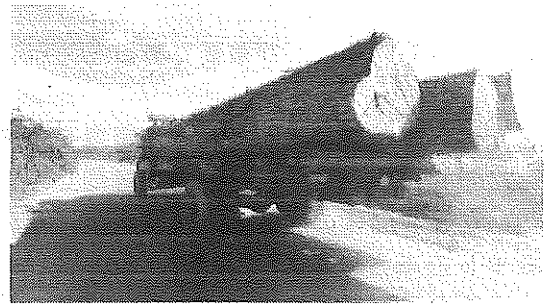
1989年アクレ州で製材業をする米倉さんを訪れた。

「牧場主から樹木を買って、値段の安い木材を合板用にしている。最初に木を切る前に、牧場主と金額の交渉となる。彼らの所有地だから。マホガニーなどの高価な木材があればよいが、合板用の場合もある」と、細かく説明してくれた。

「50haまでの小さな森を伐採する場合は、地方政府が直ぐに許可を出す。50ヘクタール以上は計画書を作って提出しなければならない。跡地利用で森林や牧場にもならない計画書に許可が出ない。つまり牧場するなら、全て許可が出る具合だ。

牧場にした所は火を入れねばならない。放置すると、牧場にとって要らない木があちこちに生えてくるから。だから森や牧場周辺を、彼らは焼く。牧場の草を柔らかな新鮮なものにしていけば牛が大変好むし、牧場は人手がないから面倒で焼くんだ。」と言う。

特に乾季の9、10月には太陽が蔽われ、飛行機も時々飛べない。それは牧場やその周りの森が広範囲に燃えるからだ、と、米倉さん。加えて説明する。「木材業者は10-30人と小規模な業者が大半だ。大きな業者では永大産業のような多国籍企業で500人ほどであり、牧場の経営者や多国籍企業のオーナーの方が資金力を持っているから、我々木材業者は牧場主の都合で伐採の交渉になり、良い木材があれば資金となるんだ。



牧場周辺から木材工場へ運ぶトラック

50ha以上の伐採は、100haであろうと500haであろうと、40万haであろうと、その1年目に半分伐採が可能。その次年にその半分が切れる。3年目には25%しか森を残さなくてよい。4年目は12%ほどで大半の原生林が消滅する。1988年に森林法の改正があり、50ha以上の土地の伐採につき、1年で50%伐採可能が、1年で80%の森を維持することになった。それであれば、4年で森林が消滅も減る。だが地方政府の役人は多くの賄賂を貰っていると聞く。」

同期、ロンドニア州で木材業者に聞き込むなら片道4時間かかるアリケメス市にしか製材・木材がなく、仕方なくポート・ベリヨ市外で日系農家を訪問した。

そこで30年になる黒田さんは言う。

「昔は地権を持つ人と持っていない人がいて、登記が不明な土地は地方政府が取り上げた。30年前、政府の役人は給料がわりに土地を貰った人もいた。入植した人はほとんど農業を知らないブラジル人だから、開墾して収穫物を取っても、土地を維持することを知らず2-3年で放棄する。熱帯農業は難しい。

森を1年で半分切ったらいかん。農業知らぬブラジル人の放棄した土地の大半を、牧場主が勝手に登記して、道路を建設してもらう。牛が増えると、また森を切る。検査官が森の奥まで来ないからです。そして牧場主は森に火をつけて森林を破壊する。3年目で大半の森が消滅する。無差別破壊ですよ。」

2010年、やっとアマゾンの森の破壊が減少した。森林破壊が減少して、私たちは今回のRio+20会議に期待した。しかし1月からドラフト案で、大規模な森林破壊、牧場開発No!の決議がない。1項目が4項目に案文が増えたが、決議内容は4年前の国際機関のようなもので進捗度が全く無い。これでは乱開発に歯止めがかからない。

## 「2012年 第1回ボルネオ・エコツアー ～ 木を植える人たちに出会いました！」

浅田 聡

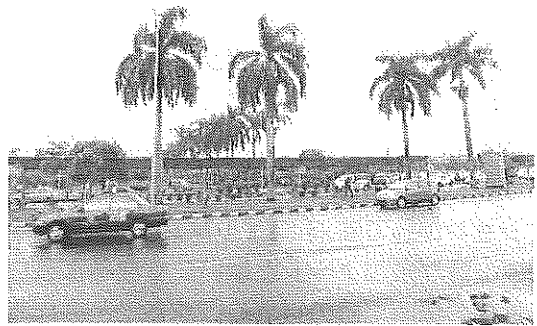
### 【1/7（土）関西空港にて】

いよいよウータン初のエコツアー。西岡さんのご家族のお見送りまであって、何かすごい事があるのかなと思ったのは僕だけでしょうか。ともあれ、全員元気にボルネオに向けて出発できたのはイッシーさんの努力のお陰です。感謝。感謝。

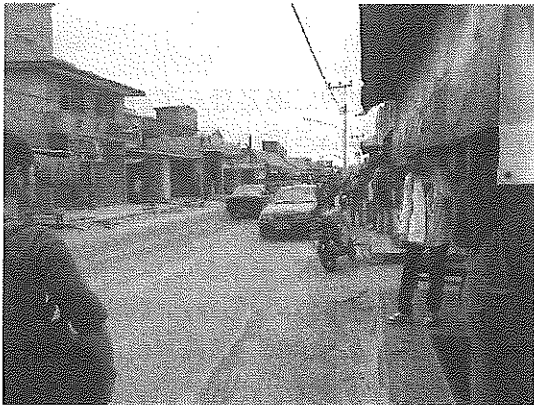
### 【1/8（日）ジャカルタにて】

着きました。ジャカルタ、かるた♪～。  
海外初の僕にとっては、見る景色すべてが  
とても新鮮で、感慨深いものがありました。

この時点では、ジャカルタがとても都会  
なのだという認識がなくて、そのまま後の  
ハラパン村に向かった訳ですが、村に着い  
たとたん、そのギャップの大きさに唖然と  
してしまったのを今でも鮮明に覚えていま  
す。



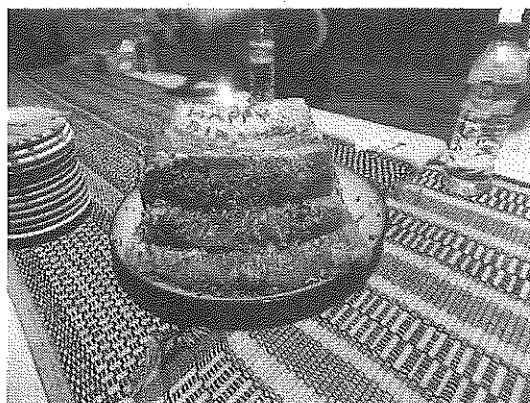
### 【1/8（日）クマイ港、タンジュン・ハラパン村にて】



パンカランプン空港からタクシーに乗  
ってクマイ港を目指したのですが、突如、  
衝撃が走りました。なんと「スピードメ  
ーターが壊れている！」「道のあちこちに大  
きな穴が開いていてガタガタ！」。思わず、  
車内で「UNBELIEVABLE（信じられな  
い）！」と叫んでしまいました。

でもクマイ港では、いかにもインドネ  
シア女性という感じの優しいシティさんにご  
馳走をいただいて、とてもハッピーでした。

さあ、いよいよハラパン村に到着です。すぐに村に入れるのかと思いきや、セコニア川の  
ポートの上で待ちぼうけ。「ふん？何？」と思っていたら、村人の歓迎セレモニーの準備  
がまだとか。いったい何があるんだろうと思っていたら、案の定でした。すごい！バグ  
ース！村の伝統的な儀式に則った勇壮な男性の踊りと剣による開門の儀式です。いや～、  
ほんとに有り難かったです。見ず知らずのよそ者にこんなことをしてくれるなんて、日本  
では考えられないですよ、本当。でもこれは、後のウェルカムパーティーやさよならパー  
ティーのほんの序章にしかすぎないということを後に知ることになるのでした。



### 【1/9（月）ジュルンブン、キャンブリーキーにて】

この日は待ちに待ったプランテーションとたくさんのオランちゃんに出会えるということで朝からワクワクしていました。まずはプランテーションからです。「ジュルンブン」という「ブンブン蜂が飛ぶ♪〜」と歌いたくなるような変な地名の場所で目の当たりにすることになったのですが、これが半端じゃないんです。着いたとたん思わず唖然としてしまうほどの規模で、つくづく人間のすることって恐ろしいなあと感じざるを得ませんでした。

普段、自分が生活している場所と並行してこんな場所が世界にあるなんて許せないという思いと、人の生活にいろいろな面で便利さを与えているという現実には頭の中が混乱を起こしてしまったのを覚えています。



ともあれ次は、キャンブリーキーです。やはり、「生」オランちゃんは格別でした。人の手によって飼い慣らされ、ほとんど商業目的の存在になっているという現実には少し複雑な感じがしましたが、愛くるしいしぐさと表情には十分すぎるぐらいの癒し効果があり、「参加者全員ノックアウト！」状態でした。オランちゃんは僕たちに、人と野生動物が仲良く暮らしていくことの重要性を静かに語りかけてくれていたような感じでした。

あっぱれ！

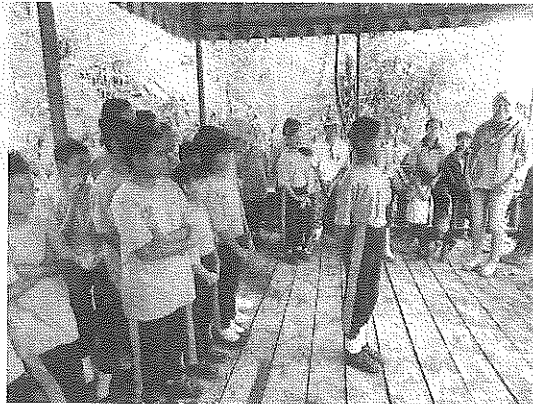


## 【1/10（火）ブグールにて】

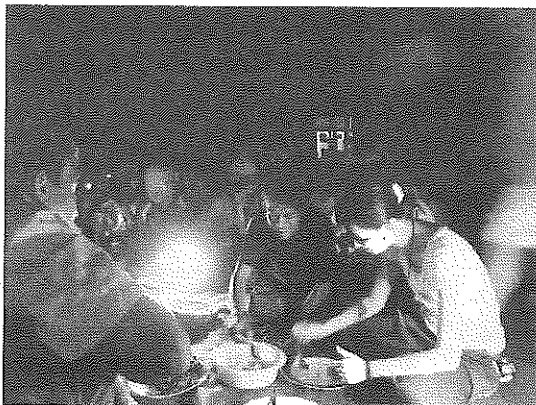
さてこの日は、地球を救うための植林の日です。地球温暖化の防止にほんの少しでも貢献ができるかと思うと、とても感慨深いものがありました。しかし、植林地であるブグールまでの道のりは遠く、途中、雨期の影響でひどいぬかるみの場所を通らなければならない所もあって、まさに山あり谷ありの道中でした。

しかしそんな中、村のバスキの愛犬「レインジャー」は、そんな道中を物ともせず、僕たちを「アイコンタクト」で励ましなが、さっそうと植林地に向かって走って行ったのでした。さっすが～！

植林地では地元産の苗を村人からもらい、参加者全員で丁寧に土に植えました。「この苗が無事に成長してたくさんのCO<sub>2</sub>を吸収しますように！南無阿弥陀仏！」。うん？ ちょっと違うかな。まあ、それはともかくとして、たくさんの苗を植えられたことで、今回のツアーの自分の目的がほぼ達成できたことに、とても満足感がありました。



またこの日の午後は、村の子供たちと環境教育も行いました。即席でその場で考えた日本のごみ事情についての説明に、子供たちが神妙な面持ちで聞いていたのがとても印象的でした。また、普段からこうした教育が行われているということで、次の世代に自分たちの土地を大切に守って欲しいという村人の思いがひしひしと伝わってくるような感じがしました。



さらにこの日の晩は、村人の盛大な「さよならパーティー」まであり、もうヘトヘト状態でした。しかし、村人のもてなしに参加者全員が大変な感動を受けたことは後に語り継がれるほどの出来事であったと思います。やはり、人と人との触れ合いはとても大切で、遠い所にいる日本人が村のことを色々と思っているということを村人に知っていただくことに、このエコツアーの意義があるように思います。いや～ほんと、楽しかったです。



【1/11（水）ボゴールにて】

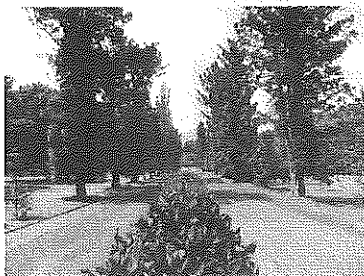
別れを惜しみつつハラパン村を後にして、僕たちはジャカルタ経由で次の目的地であるボゴールに向かいました。ここでは、インドネシア NGO スタッフと夕食を囲みながら、よもやま話に花が咲きました。特に、ウータンと関わりの深い Wetlands や Telapak の職員の方のお話は、とても興味深く、様々な環境保全の取り組みによって、現在のインドネシアの自然環境が守られているということに深く敬服をしてしまいました。



【1/12（木）ボゴール植物園にて】

いよいよツアーの最後は、ボゴールにある植物園です。非常に歴史のある園内には様々な熱帯植物が植えられ、独特の雰囲気を感じさせていました。まるでおとぎの国の別世界に迷い込んだかのような空間は、非日常的な感覚を感じさせるのに十分なほどの広さがあり、どこにも属さない世界を作り上げていたのには、感動してしまいました。

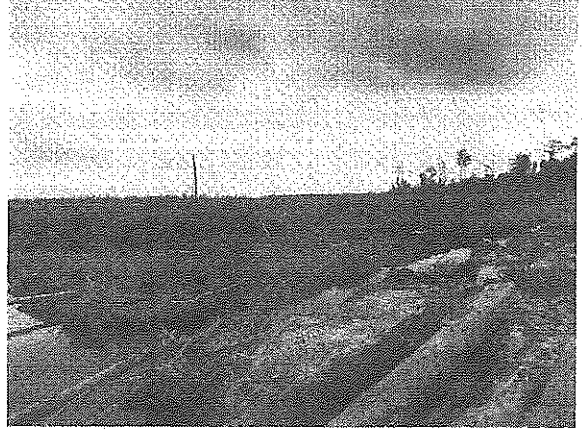
以上、第1回ボルネオ・エコツアーに参加をした感想を書きながら、改めてこのツアーを振り返ってみると、やはり「もう一度行ってみたい！」という思いがふつふつと沸き起こり、次回の第2回エコツアーの出発を待ち遠しく思うのでした。



## 押し寄せるプランテーション開発

浅田 聡

私は第1回目のツアーに引き続き、今回の第2回ツアーにも参加をしました。前回のツアーでは、主にボルネオの現状を知ることが大きな目的でしたが、今回はリアルタイムで進行しているプランテーション開発の現実を目の当たりにしてしまうことになりました。ツアーの出発前は、前回のツアーで訪れたタンジュン・ハラパン村の記憶が頭の中にあっただけですが、いざ現地に着くと状況が変わっていました。それは、村に押し寄せるプランテーション開発と村人の微妙な心境の変化でした。前回、アグロフォレストリーの見学で訪れた場所（ジュルンブン）では、周囲の森林がプランテーション開発のためにきれいに伐採されてしまい、アグロフォレストリーがまるで陸の孤島のような状況になってしまっていました。「あっ、何も無い！」。以前の記憶と現実の不一致から、思わず声が出てしまいました。「わずか半年の間に、こんなに変わってしまうのか。」とプランテーション開発のすさまじさを感じました。



また、ハラパン村の近辺でも新たなプランテーション開発の話が持ち上がり、村人の心に大きな変化をもたらしていました。それは、プランテーション企業が大金と巧みな話術を駆使して村人の多くからプランテーション開発の合意を取り付けてしまっていたためです。ハラパン村では、ここ数年、プランテーションが村の土地境界線へ入ってきているという理由で、たびたびプランテーション企業に対してデモを起こし、抗議行動を行っていただけに、とても信じられない思いでした。「金の力に物を言わせる」プランテーション企業の暴挙には大きな怒りを感じざるを得ませんでした。このプランテーション開発への合意は、村人たちの心に何か後ろめたさをもたらしたのか、前回のツアーで村人たちと大いに盛り上がった「ウェルカムパーティー」や「さよならパーティー」には、今回のツアーでは村人たちの姿はほとんど見られず、前回とは違う村人の状況に驚きを隠しきれませんでした。

こうした状況にはFNPF（ローカルNGO）も困惑した様子でしたが、リーダーのバスキは落胆しながらも、プランテーション開発の阻止に向けていくつかのアイデアを考えていました。村の再起のために何とかしようと頑張っているバスキの姿には、「この状況を打開しなければいけない！」、「ウータンとして是非、サポートをしなければ！」という強い思いを抱かざるを得ませんでした。帰国した現在は、プランテーション企業の撤退を図るべく、ウータンのみなさんと様々な打開策について話し合っています。

アブラヤシ・マフィア  
\*タンジュン・プティン公園でもトンデモナイ開発計画・Oil Palm Mafia登場か?\* 西岡良夫

2010年5月 BBCによると、全世界の脊椎動物の数は、1970～2006年までの間にそれぞれ3分の1ずつ減少し、国連・地球規模生物多様性概況(GBO-3)で、自然破壊が経済影響を及ぼす転機がすぐに来るといふ。

こんな中でマレーシア政府は、大企業サイム・ダービーやリンブナン・ヒジャウ社がインドネシア国境サバ州、サラワク州で泥炭地を含む森林をアブラヤシ開発につき小企業を買い占め、広大な面積を開発しようとしている。マレーシア企業等が特に推進する国境の地や森林をアブラヤシにする【Heart of Borneo】計画は、2007年パリ気候変動枠組み条約会議でブルネイ政府が反対し、その後インドネシアも反対し、やむなくマレーシアもインドネシア・ブルネイ・マレーシア3国間で2008年に【Heart of Borneo】停止へ合意とした。加えて2010年4月 ジャカルタ・ポストでは、インドネシア政府はアブラヤシ農園を森林を含む検討をやめると決断と発表した。

インドネシアで違法伐採が激減し、インドネシアの状況を見て2010年5月26日、ノルウェー、インドネシア政府は「10億ドル支援と引き換えに2年間の新規の森林伐採を停止するモラトリアム」を表明した。ジャカルタ・ポスト(2010/5/27)報道等は、インドネシアは、泥炭湿地やその他の熱帯林の伐採を2年間停止というモラトリアムを二国間で決めた」と。ユドヨノ大統領は、「温室効果ガス減少とインドネシアとノルウェー間の森林劣化の共同削減をする」と署名を実施した。ノルウェー首相は、「この貢献が森林伐採を減らすことに基づく。森林伐採減少に、監視と検証が真の進展を確保するための鍵だ」と述べた。

ユドヨノ大統領は、「インドネシアの多くの森林を管理することができないが、ノルウェーの援助で私たちはインドネシアが良い行いことができ、結果を得ると思う。我々は気候変動枠組で、REDD+(\*)の交渉メカニズムの結論を待つことはできない。森林からのCO2削減排出量と森林劣化に関し、現実的に行われるために中間機構を介しUNFCCCのプロセスを求めた。インドネシアは、先進国とREDD+の作用につき炭素排出量の目標を達成するために、我々は熱帯林保護のためにCO2排出防止と生物多様性の良い関係を保つことで地元住民を助け、世界の豊かな森がより豊かになる」と説明した。

それに先立ち、インドネシア3大臣は、泥炭地の転換の食い止めに誓ったという。グリーンピースによると「インドネシア政府はこれ以上泥炭地を転換するような開発許可を出さない」と3大臣が話したという。ザルキフィ林業大臣や農業大臣は「深さ3m未満の泥炭層を含む土地の新規開発許可をしない」と非公式会談の場で約束。現行の政府案では、深さ3m未満の泥炭地はプランテーション、宅地、採掘用地など10種類の土地へ転換が認められている。林業省林産物開発部長Hadi Daryanto氏は、「(泥炭地開発の)許可は生態系回復プロジェクトにのみ与えられる。この許可も本当に生態系回復を目的としたものであるか企業を入念に調査してから発行」と述べた(2010/5/15 Jakarta Post)。ところが、あまりにも泥炭湿地が多く広がっているので、アブラヤシ企業は地方政府を秘かに巻き込んでいた。ジャカルタ・ポスト(2012/6/3)報道で、5月のモラトリアム2周年会合でPIPIB(森林伐採一時停止地域に関する地図)第2補正で、インドネシア政府は92,245万haの天然林と泥炭地を保護地から除外し、保護地は65,200万haとなると。それに対し、ノルウェーは「CO2削減目標を満たせない」と批判した。

タンジュン・プティン国立公園内外の土地含むハラパン村の周りの原野や農地の買収し、アブラヤシ農園にしたいとPt. Bumi Langgeng Perdanastara(Pt. BLP—親会社はBW Plantation)が蠢く。国立公園内一部?まで買収の計画だと。調べると、買収地域の大半が泥炭湿地3m以上の深さと判ってきた。となるとモラトリアム違反だ。この企業の親会社の社長の月収は何と7.5万円。同国の某NGOメンバーより安い。労働者も192名のみだが、最近儲かり、香港、マレーシア、インドネシアの銀行からの高金利ローンで、アブラヤシ農園を巨大に作る。

Wetlands Intercomman氏、前林業大臣相談役トグ氏は、「2012年に深さ3m以上の公園外の泥炭湿地の原野等を買収してないなら、泥炭地アブラヤシ開発のモラトリアム違反の事例。国立公園内の事件なら国が介入できる」と。モラトリアムは本年1月から施行され、泥炭湿地や森林の開発は原則禁止で、「当然タンジュン・プティン国立公園近辺の泥炭湿地は問題だから、モラトリアムは遂行せねばならない」といった現林業大臣の意向と、地方自治体・地方の公園事務所は反する意思で、驚いてしまった。持続可能なアブラヤシ開発を目指すという企業であるなら、泥炭湿地の開発を止めよ。泥炭地を破壊してCO2大排出するのは「破壊的Oil Palm Mafia」だ。

## 【Rio+20 会議、「グリーン経済」等の内容で対立】

6月13日から開催のリオ+20 会議(地球サミット)は、内容の不明確な「グリーン経済」等を巡り、先進国・途上国含め意見対立し、閉会前6月20日、ブラジル政府が押切って「我々が望む未来」を採択。日本の代表役・JACES 古澤広祐氏は「20年を振り返ると、地球温暖化、森林減少が進み、貧富の差も拡大。事態が深刻化もリーダーシップを発揮する存在がない」と。アマゾンで最大の森林破壊が牧場開発であるが、大規模開発停止の文言も今サミットに盛り込まれず。先住民等がリオ市内で抗議のデモを繰り広げた。(資料:毎日新聞、ロイター、サンパウロ新聞等)

## 【国際的同盟が森林犯罪に取組む】

インターポールと国連は、国際的な森林犯罪対策を開始するため「プロジェクト・リーフ」とし、違法伐採と違法木材取引に関連犯罪を目標に取組むと。インターポール環境問題責任者デビット氏は「違法伐採は各国内法に規制される問題でない」と。(6/8 BBC)

## 【ギター・ギブソン、木材の違法輸入で違反金】

米国米司法省は8月6日、ギター材料として絶滅危惧種の木材を違法に輸入した疑いがあり、ギター大メーカーのギブソン社は、訴訟を回避するために米当局に35万ドル(約2700万円)違反金と支払うことで合意と発表。米司法省モレノ次官補は声明で「ギブソン側は、購入していたマダガスカル産黒檀が過剰な伐採を促し、希少種保護の趣旨の法律に抵触する可能を認めた」と発言した。(資料:08/07 AFP)

## 【Lion 洗剤用、国際認証パーム油使用へ】

ライオンは2012年中に国際的な認証制度を運営組織「RSPO/持続可能なパーム油の円卓会議」認証したパーム油使用を開始。商社経由で認証の油を購入しLionケミカル(墨田区)で加工。2015年迄にパーム油を全て認証へ目標。(資料:日刊工業新聞7/30)

## 【ノルウェー、パーム油消費が3分の2に減少】

世界のパーム油88%生産するインドネシア、マレーシアで熱帯林破壊の主原因となる。ノルウェー向けのパーム油も2国で生産。同国の食品生産者は2011年に1.5万tのパーム油を使用。圧力を結集させキャンペーンは、同国の消費を2/3減少と成功。(資料:フェアウッド News 8月)

## 【インドネシアとマレーシアの森林伐採 2000~2010】

『Global Change Biology』の発表で、インドネシアとマレーシアが2000年から2010年間に1100万ha以上の森を失った。ほぼデンマークの大きさになる。損失の大部分は平地林が7,800万haで、2000年の森林被覆は11%に減少と。泥炭湿地林は19.7%に減り、最も高い割合で失う。農園転換の以前は、歴史的に平地林が伐採業者にターゲットにされ、泥炭湿地は産業用アブラヤシ農園、パルプ・紙のプランテーション地に変えられているとMongabayが指摘。(資料:Mongabay.com. 7/15)

## 【インドネシアで泥炭地を試験的に再び保護も】

インドネシア政府は5月21日、パーム油開発の中心のスマトラ島アチェで、泥炭地の保全をと公表。森林劣化による排出を削減することを目標とするノルウェーとの10億ドルの気候取引の下、2年間の森林開発のモラトリアムを設置した。アチェ県の前知事は、パーム油企業に泥炭地開発許可等の禁止を撤回していた。環境団体からは法的アクションを促し、その後警察や複数の政治団体による調査等もされた。

(資料:5/21 ロイター、Jakarta Post)

## 【インドネシアの REDD の現状-問題多し】

ジャカルタ・ポストは、ノルウェーとの協議で、「2年間の天然林や泥炭地の新規伐採モラトリアム」が成功と見えたが、先行きは困難と。先月2周年記念会合で、PIPIB(森林伐開の一時停止地域に関する地図)2次補正を政府が発表し、92,245haの天然林と泥炭地が保護地から除外され、保護地は65,200万haとなる。またノルウェー環境相は「対策が緩められ、モラトリアムが作動していない恐れがあり、CO2削減目標をこのままでは満たせない」と発言。

(資料:5/23, Mongabay.com; 6/3, Jakarta Post)

## 【サイム・ダービー社の CEO 汚職スキャンダル】

サイム・ダービー(Same Darby)社は車製造・アブラヤシ・不動産等のマレーシア最大の会社で、世界最大のパーム油コングロマリット。だがマレーシア政府により完全にコントロールされている。このため、7月2週の前最高取締役が100万リンギットの業務上横領での逮捕及び訴訟で明らかになった。サイム社が汚職に巻き込まれることには余り驚かないかも、との噂だ。(資料:7/19 Sarawakreport.org)

＊ 雨の季節の準備ができています。

## <会計より>

井下祥子

希望の村の苗木づくりのためのカンパは引き続き募集しております。よろしく  
お願いいたします。

## <会費・カンパ等をいただいた方> (敬称略) (2012. 6. 15 ~2012. 9. 30)

伊東万千子 井下祥子 H.I. 上田真弓 下山久美子 助友伸子  
辻垣正彦 中島紘 福永一美 福本敬夫 二木洋子 南俊二 蓮原耕児

## <<未使用切手をいただいた方>>

伊藤哲男 井下佐和 関目実

先日、『リオ+20会議の報告と20年前・10年後のアマゾンから』に参加  
させていただいたものです。森の通信誌までいただきました。寄付として未  
使用切手を送らせていただきます。活用くださればありがたく思います。

関目実

さっそく、呼びかけにこたえて沢山の切手を、ありがとうございました!m(\_ \_)m  
引き出しに眠っている切手がありましたら、今後もよろしくお願いいたします。

## <おたよりから>

\* 自然保護のために日夜ごころう様です。若い力で少しでもよくなりますよう  
がんばってください。僅かしかお手伝いが出来なくてすみません。

\* いつもありがとうございます。何もできなくて、せめて郵送料のたしに…。

\* わずかですが、お役立てください。

\* カンパとして、5,000円払い込みます。

皆様、大変な中、お気持ちありがとうございます。一同がんばります。



## ウータン・森と生活を考える会

[OFFICE] 〒530-0015 大阪市北区中崎西1-6-36

サクラビル新館308

「関西市民連合」気付

Tel.06-6372-1561

<http://www.hutang.jimdo.com>

【一部】300円 【年会費】4000円

【郵便振替】100930-4-3880

◎購読希望の方は郵便振替で申し込み下さるか、又事務所までご連絡下さい。

◎ウータン定例会は、毎月、第2、第4火曜日7:00pmより「関西市民連合」事務所にて行っております。